

大好きなもの

いちばん古い記憶は、3歳の誕生日パーティーの記憶だ。両親から、飛行機のおもちゃをもらった。その飛行機にはタイヤが付いていて、床に置いて少し後ろに引いてから手を離すと、びゅーんと走り出した。パーティーの写真には、そのおもちゃといっしょに、飛行機の形のケーキも写っているから、たぶん、当時のわたしは飛行機に夢中だったのだろう。

6歳の頃はタクシーやトラックを見るのが大好きだった。その頃描いた絵には、緑色のタクシーが描かれていて、絵の横には、幼い文字で「タクシーのパイロットになりたい」と書いてある。乗り物の運転手はみんな「パイロット」だと思っていたのかもしれない。

小学生のときは、家の手伝いをして少しずつおこづかいを貯めて、プラモデルを買っていた。車のプラモデルだ。電池を入れるとものすごい速さで走った。はじめは設計図通りにプラモデルを組み立てていたけど、だんだん、自分だけの工夫を加えるようになった。少しでも速く走るように。もっとカッコよく見えるように。

10歳の誕生日は、人生最高の日の1つだった。父が、町でいちばん大きなプラモデル屋さんに連れて行ってくれたからだ。いつも自転車で行っていた近所

のおもちゃ屋さんより 100 倍くらい大きく感じた。

「どれか1つ、買ってあげるよ。ゆっくり選んで。」

と父が言ってくれた。私はその1つを選ぶのに1時間以上かけた。結局どんなプラモデルを買ったのかは忘れてしまったけれど、それを選んでいた間の興奮は忘れられない。

中学生のときはレーシング・カーにはまった。テレビでレースを見たり、雑誌を買ったりして、朝から晩まで、頭の中は車のことでいっぱいだった。中学校を卒業するときの作文には「将来はレーシング・カーの雑誌の記者になりたい」と書いた。

結局、わたしは記者にも、タクシーのパイロットにもなっていないけど、今でも車が好きだ。この間、ソファで車の雑誌を読んでいたら、息子が膝の上ののってきた。

「ねえねえ、お母さんは、子どもの頃、何になりたかった？」

「お母さんはね、子どもの頃、『タクシーのパイロットになりたい』って思っていたんだよ。」

わたしがそう言うと、息子は「運転手でしょ？」と言って笑った。息子は車に

は全く興味がなくて、かっこいいものより、かわいいものが好きだ。最近はお菓子作りにはまっている。次の息子の誕生日には、お菓子作りの道具の専門店に行こうと思っている。町でいちばん大きな店に。

(1004 字)

(2021.4 Written by Junko SATO)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.